

中国犁耕初探

齋 藤 英 敏

- | | |
|---------|---------|
| 1. はじめに | 4. 民俗史料 |
| 2. 文献史料 | 5. まとめ |
| 3. 考古史料 | |

—— 論文要旨 ——

中国においての犁耕技術は、一体いつごろ出現してくるのであろうか。また、犁は中国独自に発明されたのか、それとも外来の農具なのか、これらの問題はいずれも中国農業史上、未だに解決されていない重要な問題である。

文献史料による犁耕の初現は、『論語』・『韓非子』・『国語』・『管子』の記述から、春秋・戦国時代まで遡ることができる。また考古史料からは、上海博物館蔵の山西省渾源出土とされる牛尊（酒器）に鼻環（鼻輪）があることから、牛の役畜としての利用が想定され、且つ前記の文献史料との整合性から、やはり春秋時代の終わり頃（晉国）まで遡ることができる（米田 1968 他）。

しかし最近では、長江下流域に展開した崧沢文化（BC3800～BC3300）後半期に出現し、良渚文化期（BC3300～BC2300）のものが多い石犁（石製の二等辺三角形を呈す）を、人力か畜力かは不明としながらも、犁先として捉えようとする意見が多い（牟・宋 1981 他）。さらに、江西省新干県大洋洲殷代墓から、儀式用とされる2点の青銅製犁先とされる遺物が出土しており、従来の華北陸田地帯誕生説や挽畜の起源問題などが、再検討を迫られているのが現状である（渡部 1999）。

この問題は筆者が、群馬県において顕著に見られる極小区画水田から大区画水田へと変化する要因と考えてきた「犁・馬鋤を伴う牛馬耕の伝来・普及」問題とも関係してくる。群馬県では、AD6世紀代の極小区画水田が、9世紀代には方格地割（条里地割）の大区画水田へ変化している。また長野県や静岡県においても、8世紀末～9世紀初（長野）・奈良時代前半（静岡）に、それぞれ条里地割が導入された可能性が、それぞれ指摘されている（矢田 1996、臼井 2002）。

このような現状の中で、東アジア地域で最も早く犁耕技術が採用されたと考えられる中国の状況を理解しておくことは、群馬の発掘成果に代表される水田跡の時代的変遷を考える上で、非常に重要であると思われる。

そこでここでは、現段階における中国の犁耕に対する研究を概観し、東アジア地域の水田稲作の歴史を考えていくための基礎作業としたい。

キーワード

対象時代 新石器時代～魏晉南北朝時代
対象地域 東アジア（主に中国）
研究対象 犁・牛馬耕

1. はじめに

中国の犁耕については、歴史学・考古学・民俗学などの分野から、それぞれ長い研究の歴史がある。従来、春秋戦国時代に、犁耕が導入・普及したとされてきた。また戦国時代商鞅の大改革の一部とされる100歩1畝→240歩1畝への変革も、犁耕の導入・普及と大いに関係すると考えられている¹⁾。

そこで、中国の犁について、大きく文献史料・考古資料・民俗史料に分類して、それらの研究史を概観し、資料を確認して、研究の現状を把握していく。

2. 文献史料から見た犁耕

文献資料は、主に中国古典に記された文章の断片から、犁耕・牛馬耕について書かれた部分を抽出することが基本となる。多少の時代的前後はあるが、従来から指摘されている内容について確認していく。

呉存浩によると、中国における牛耕の開始については、いくつかの説があるとする。その中には、伝説上の神農（三皇の一人）や后稷（周の始祖）が始めたとする説もある。しかし、それらを除くと、①殷代、②春秋、③戦国、④漢代、⑤晉代（魏晉南北朝時代）の5つの説がある。さらにその中で、①殷代説については甲骨文の中にそれを示す文があるとする説もあるが、これについては不確実であるとし、且つ④漢代説・⑤晉代説についても、晩すぎるとする²⁾。それでは、文献からはいつの時代から牛耕が確認できると捉えておけばよいのであろうか。このことについて、箇条書きで資料を抽出しながら考えてみたい。

①『國語』晉語九に、晉の趙簡子に対して、竇犢（孔子と同時代の人）が語った言葉のうちに、

夫・中行氏不恤庶難、而欲擅晉國、今其子孫將耕於齊。宗廟之犧、為畎畝之勤、人之化也、何日之有！

（范・中行之両氏は、人々の苦難に見向きもせず、晉國を擅断したが、今はその子孫が齊において農耕に従事している。宗廟祭祀用の牛を農耕に使用している。人の移り変わり、わからないものだ。）

とある。これは春秋時代（BC770～BC403）と戦国時代（BC403～BC221）の分岐点に設定されている、晉国分裂時のことがテーマとなっている。晉国には、もともと晉王の下に范・智・中行・韓・魏・趙の六卿がいたが、権力闘争の末、范・智・中行之三氏が滅ぼされ、韓氏・魏氏・趙氏（三晉）が晉を分割した。この時（BC403）をもって、戦国時代の始まりとなる。その范氏・中行氏の子孫が、齊で牛を農耕に利用していたという内容である。つまり、この記述からは春秋時代末～戦国時代初にかけて、晉・齊國において、牛が農作業に従事していたことを窺い知ることができる。

ちなみに『國語』の著者は、『春秋左氏傳』を書いた左丘明と言われ、春秋時代の8国（周・魯・齊・晉・鄭・

楚・吳・越）の歴史を国別に記したもので、周の穆王35年（BC967）から、貞定王16年（BC453）の事跡を含んでいる³⁾。

②『論語』第十二顔淵篇に、

司馬牛問仁。（司馬牛、仁を問う）

とある。司馬牛は、姓を司馬、名を耕または犁、字を子牛という⁴⁾。

③ また同様に、『論語』第六雍也篇に、

伯牛有疾……（伯牛が病氣を患う……）

とあり、伯牛（^{ぜんはくぎゅう}冉伯牛）は、姓が冉、名は耕、^{はくぎゅう}伯牛は字という⁵⁾。

④ 同じく『論語』第六雍也篇に、

子謂仲弓曰、犁牛之子、騂且角、雖欲勿用、山川其舍諸。

（犁をひくまだらの牛の仔でも、赤毛で整った角を持っていると、人間が祭の生贄に当てないでおこうと思っても、山や川の神々のほうで、目こぼしにはなさらないだろう）

とある。犁牛については、まだらの毛の牛という説と、耕作用の犁を牽く牛という説などがあるとされるが、参考までに挙げておく⁶⁾。

⑤『韓非子』外儲説左下に、

少周室爲襄主驂乘、至晉陽、有力士牛子耕与角力、而不勝。

（少周室という人が襄主の護衛をして晉陽に至ったときに、力士である牛子耕と角力をしたら負けてしまった）

とある。ここでも名前に、牛や耕といった文字が使用されている。韓非子（？～BC233）は、戦国韓の一族で、子を付すのは敬称。韓のために秦始皇帝に使いし、始皇帝はその才を喜んで重用せんとしたので、宰相の李斯に妬まれ毒殺された。

⑥『管子』乘馬篇に、

丈夫二犁、童五尺一犁、以爲三日之功。

（成人男子に二本の犁（鋤）、十五歳以下の少年には一本の犁（鋤）を持たせて、毎年三日間賦役につかせる）

とある。この犁は鋤の意味とされるが、資料として挙げる。また、「童五尺」は、身長五尺未満の少年で、成人に達していない者を指す。当時は、十五歳以上が大人。『管子』は、春秋時代の齊の桓公（春秋の五覇）に使えた管仲（？～BC645）が著したとされる書。内容的に、戦国後期のものが多く、どこまでが管仲の事業や思想と関係あるかは不明とされる⁷⁾。

⑦『管子』輕重甲に、

今君躬犁墾田、耕發草土、得其穀矣。

（今日、わが国は主君みづから率先して開墾事業を進め、穀物の生産を増大させた。）

とある。これは、農地が増大したにもかかわらず、巷に餓死するものがあるのは、穀物を独占してしまうものがあることに原因があることを指摘した文章の一文であ

る。

以上、簡単に春秋戦国時代の犁に関する記述を抜き出してみた。呉存浩は、『論語』・『管子』・『國語』などの記述から、春秋時代には牛耕が出現したと考えている⁸⁾(呉 1996)。

李根蟠は甲骨文字から、殷代にはすでに牛耕があったとしながらも、木・石製であり非効率であり主流にならなかったとしている(李 1991)⁹⁾。

周昕は文献資料から、未だ未成熟で実験段階としながらも、戦国時代にはすでに牛耕が行われていたとする(周 1998)¹⁰⁾。

日本では、天野元之助が、「文献上から耕具としての犁を求めると……戦国時代となるが、牛に曳かせたスキが犁の名で呼ばれたのは、その頃だとしても、名称より先にその実体が存在したと見ても、差し支えなからう。¹¹⁾」(天野 1979)とされ、戦国時代より遡る可能性を指摘している。

西嶋定生は、「牛耕のことは文献的には戦国時代から現われ、また『國語』晉語には宗廟の犠牲用の牛が農耕に使用されるようになったという記事がみえるので、牛耕の起源もおそらくこの頃のことと考えられている」(西嶋 1981)¹²⁾とされる。

米田賢次郎は、『國語』晉語九の文章から、「晉の国では春秋時代から牛耕が行われていたことは明らかであるが、ただこの史料では普及の程度がはっきりしない……¹³⁾」(米田 1968)とされ、牛耕が十分に普及したのは戦国時代と指摘されている。

このように、文献史料からは春秋時代の晋国などで牛耕が採用されていたことが窺え、且つ「犁」という言葉に示されるように農具としての犁が利用されていたことがわかる。そして、社会的にある程度普及したのは戦国時代頃ということが考えられよう。

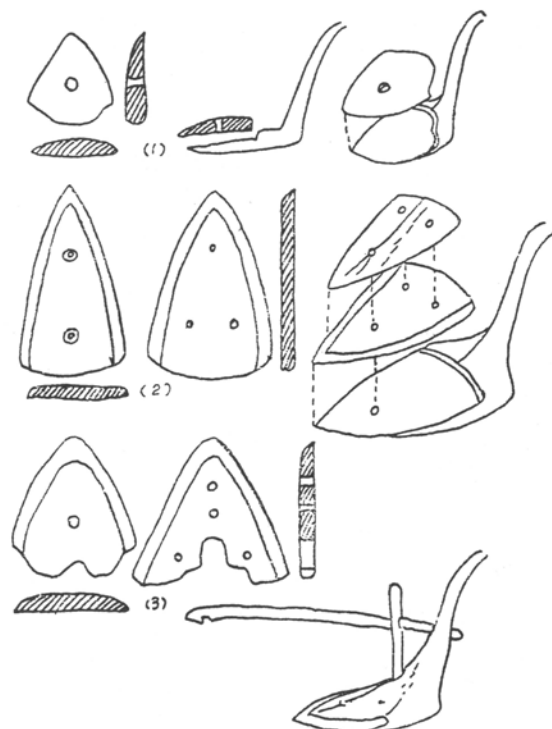
ただ、犁があり牛がいれば、すぐさま人力耕から牛耕に変化するとは限らない。牛耕が普及するには、人力耕に要する費用に比して、牛耕のそれがコスト的に安価と見なされることが前提とならう。さらに言えば、牛の維持費が、牛による経済的収入より安価でなければならず、技術的には牛耕のほうが作業効率がよいとわかっていても、維持費などのコスト面から敬遠されることもあったと考えられるからである。

3. 考古史料から見た犁耕

犁耕関連の出土遺物には、どのようなものがあるのだろうか。時代を追って見ていくことにする。

まず、忘れてはならないものに、長江下流域に発展した新石器時代の崧沢文化(BC 3800~BC 3300)・良渚文化(BC 3300~BC 2300)に主に見られる、石犁・破土器を忘れてはならないだろう。

石犁・破土器については、牟永抗・宋兆麟(牟・宋 1981)が犁先として考察して以来、多数の中国・日本の研究者が言及されており、犁耕具の起源問題や、日本における牛馬耕・水田稲作を考える上でも極めて重要な遺物となっている(図1)。



——插图三——(1)I、(2)II、(3)III式犁形破土器示意图

図1 牟永抗・宋兆麟による復元案(牟・宋 1981)

犁先として石犁を積極的に評価する中村慎一は、「新石器時代の石犁の形態が、初期金属器時代(馬橋文化)の石犁を経て、さらに後世(漢代)の金属製犁頭へとスムーズに移行することによっても支持される¹⁴⁾」としておられる(図2から図5への変遷)。しかし、一方で中村は石犁背面に残っている装着された際のものと思われる幅狭の痕跡から、「……不安定で、土中を牽引することが可能かどうか疑問である」とされ、犁耕具と認定する際のネックがあることも指摘しておられる。そして、出土状況・装着痕等の総合的見地から消去法によって、「やはりカラスキと考えるのがもっとも妥当である¹⁵⁾」と結論されている(中村 2002)。

梶山勝は、牟永抗・宋兆麟の分類や李曙行の分類、また中国や日本の学者の評価を検討しながら、李曙行や安志敏の指摘を支持している。そして、「石犁として使用された可能性のあるものは、長さが15~25cm、単孔、あるいは多孔のもので、孔が一行に配置されているものに限って考えておきたい」とされ、且つ「安志敏氏が指摘されたように、石犁が翻土用の農具であるということが十分に証明されていない現状では、3式に分類されたそ

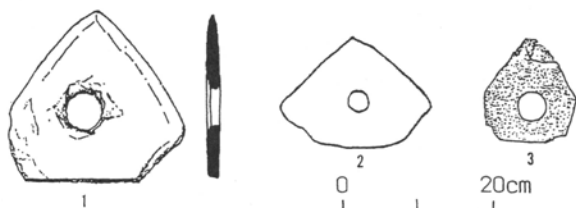


図2 崧沢文化の石犁 (中村 1986)

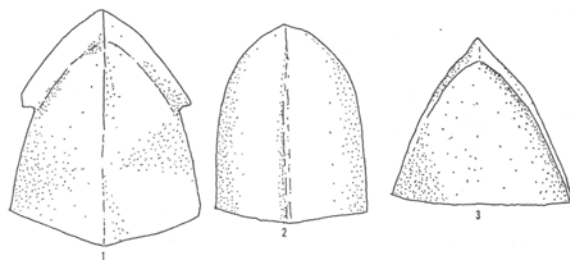


図5 漢代の鉄犁 (中村 1986)

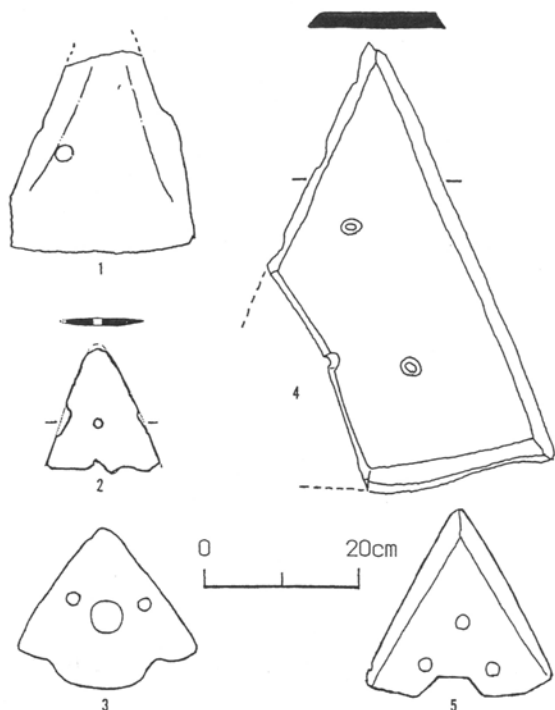


図3 良渚文化の石犁 (中村 1986)

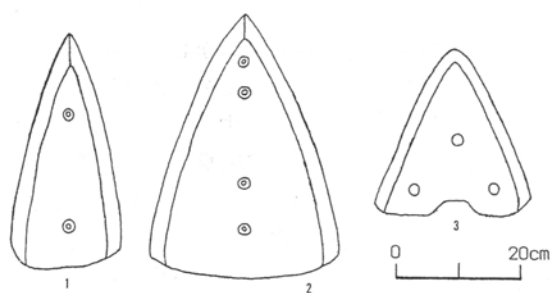
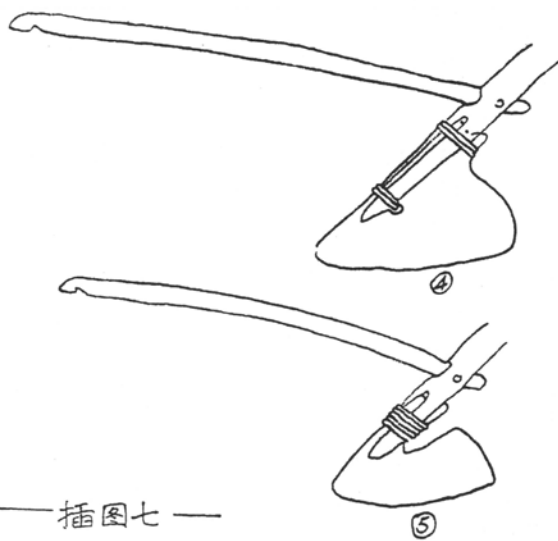


図4 印文陶文化の石犁 (中村 1986)

それぞれの形式が、異なった用途を持っていた可能性もあり、今後、石犁と称される三角形石器の正しい用途を明らかにしていく必要がある。資料の蓄積を待って今後の課題としておきたい。」と結論されている。さらに、梶山は破土器については農具（除草具）との理解を示している。そして、着柄方法については牟永抗・宋兆麟の復元

案（図1）とは異なって、愛知県海部郡大治町のオシガマ（ピンキリガマ）と呼ばれる畦の側面を削るように除草するための農具や江戸時代の罫（ナヒツエ）との類似性を指摘され、復元案（図1）の「轆の部分是不要である¹⁶⁾」と結論されている（梶山 1989）。

石犁を犁先とすることに、より慎重な態度を示しているのは河野通明である。図1のような牟永抗・宋兆麟（牟・宋 1981）の復元案に対して、木部の台に取り付けることについては概ね妥当としながらも、所謂犁轆（図1の最下図）のような引棒を付けてよいかどうかは出土資料は何も語っていないとされ、「論者の牛犁の先行資料として見ようとする意図がはたらいっているであろう」とする。そして、「石犁は、牽引して使われたものであろうという点で、牛耕への進化の可能性を含んでいたと判断できるが、そこから牛耕に到るにはなお何段階かの階層が必要であり、その間の確実な資料は未発見というべき」とされ、且つ破土器（図6）についても「地面に切り目をいれていくだけの溝切り具であり、犁とは異なる用途をもつ別系統の農具」であるとされる。そして、「犁耕の中国国内起源説の論者があげてきた論拠の多くは、



— 插图七 —

図6 破土器の復元案 (牟・宋1981)

進化の系統樹の犁の枝の根元に位置するものとはいえず、したがって中国国内起源説ははなはだ確実性に乏しいといわざるをえない¹⁷⁾と結論される(河野 1996)。

最近では小柳美樹が、石犁・破土器についてまとめておられる(小柳 1997)。小柳は石犁について、「石犁の出現によって、持続的に農作業が行われるようになったことを評価すべき」とされ、且つ「問題にすべきは、これら石犁の牽引が人力によるものなのか畜力によるものである」とされる。そして、寧波市慈湖遺跡から出土した小さな軛(くびき、図7)を例にあげ、現在でも中国

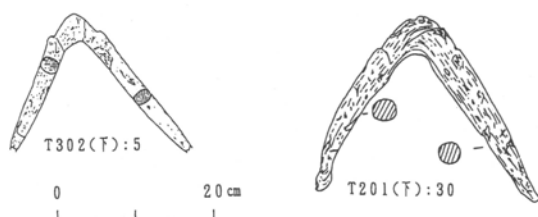


図7 寧波市慈湖遺跡の軛(兪 1996)

では人力の犁耕が行われている状況などから、石犁が人力によって牽引されていた可能性を指摘しておられる¹⁸⁾。また破土器については、農具という意見と、切割用の包丁の類であるとする意見があるが、破土器のほとんどが、集落遺跡内からは出土せず、単独に無遺物無遺構のグライ土層などから出土することが多いことから、「農業関係の道具と考え¹⁹⁾」たほうが無難とされる(小柳 1997)。

崧沢文化期(BC 3800~BC 3300)から見られ、主に良渚文化期(BC 3300~BC 2300)に盛行する石犁や破土器を、どのように評価するかについては、日本や中国の研究者の間でも意見の分かれる所であり、今後の展開を注視していく必要がある。



図8 商(殷)代青銅犁宏(江西省新干県大洋洲)

次に時代を下って殷代の青銅犁先を見ていこう(図8・図9)。1989年、江西省新干県の殷墓から青銅製の儀

式用犁先(犁宏)が2点出土したとの報告がある。このことから、殷代において犁耕具がすでにあったことになるが、これについても他に類例が無く、やはり今後の類例の増加を期待したい。

ただ筆者は、一緒に出土している青銅製の耜(図10)が、構造的には図8・9の犁先と同じであることから、

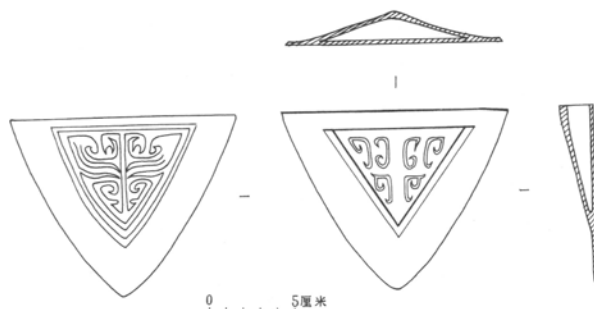


図9 商(殷)代青銅耜実測図(江西省新干県大洋洲)

図8・9の耜先も、人力用の耒または耜の先としての可能性もあると考えている。ただ、平面形は三角形を呈しており、その後の犁先と近似していることもまた事実である。

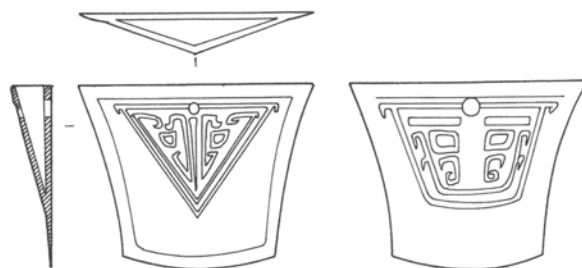


図10 商(殷)代青銅耜実測図(江西省新干県大洋洲)



図11 春秋時代牛尊(山西省渾源出土)

次に注意しなくてはならないのは、やはり春秋時代とされる牛尊(図11)である。山西省渾源出土とされ、現在は上海博物館に所蔵されている。この牛尊には鼻輪(鼻環)が付けられていることから、役畜として利用されて



図12 東漢牛耕画像石（江蘇省睢寧県双溝）

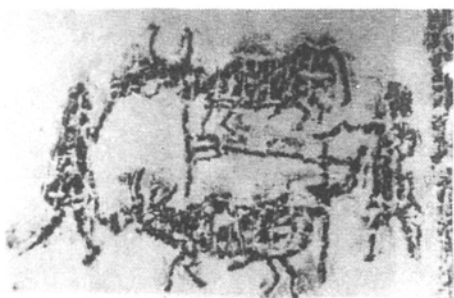


図13 東漢牛耕画像石（江蘇省泗洪）



図14 東漢牛耕画像石（陝西省綏徳県王得元墓）

いたことがわかる。そして前述の『國語』晉語九に晉の貴族が国内兼併の戦争に失敗して齊に逃げ、その子孫が農民となって、宗廟を祭るための犠牲用の牛を農耕に転用している、という内容の文章と照らし合わせることで、牛が役畜として農耕に利用されていたことが窺えるのである。

さらに時代を下って漢代になると、牛耕は画像資料として数多く見られるようになる。それは漢代墓に残された画像石や壁画、またそこから出土する水田模型等が残されているからである（図12～16）。

渡部武は、これらの資料から、漢代の犁について、6点を指摘されている。

① 漢代の犁は枠型犁で、これには犁床と犁梢が別木からなる長床タイプの方型犁（図14・15・16 筆者）と両者



図15 東漢牛耕画像石（陝西省綏徳県）



図16 東漢牛耕画像石（陝西省米脂県）

が一体となった無床（図12・13 筆者）もしくは短床タイプの2種類があった。

② 犁の繋駕方法は、2牛の頸に差し渡した横横（犁衡）から牽引力を取る、二牛抬横式（図12・13・15・16 筆者）が広く普及していたが、これとは別に1牛で曳く揺動犁も普及していた。また、頸木および引木の犁槃と思しき繋駕具も採用されていた。

③ 轆は単轆と長轆との両用があり、いずれも直轆犁が主流で、まだ曲轆犁が普及していなかった。

④ 鉄製犁宏と犁冠とは規格が一律ではなく、土壌の性質や作業の内容に応じて、先端の角度の鈍鋭、形の大小があった。

⑤ 犁鏵は、片側に反転させるタイプのものと両側に反転させるタイプのものがあった。素材は鉄製であるが、当然のことながら遺物として残りにくい木製の鏵もかなり採用されていたと考えられる。

⑥ 犁先の角度を変え、耕土の深浅を調節するための犁評（簡単な楔状のものであったろう）が考案されていた^{20）}。

以上のような渡部武の見解に対して、河野通明はいくつか批判的に評価している。とくに②の「……1牛で曳く揺動犁も普及していた……」に対して、「普及の程度は私はもう少し低く見たい」とされている^{21）}。

最後に、曲轆犁（図17）について見ておこう。それま

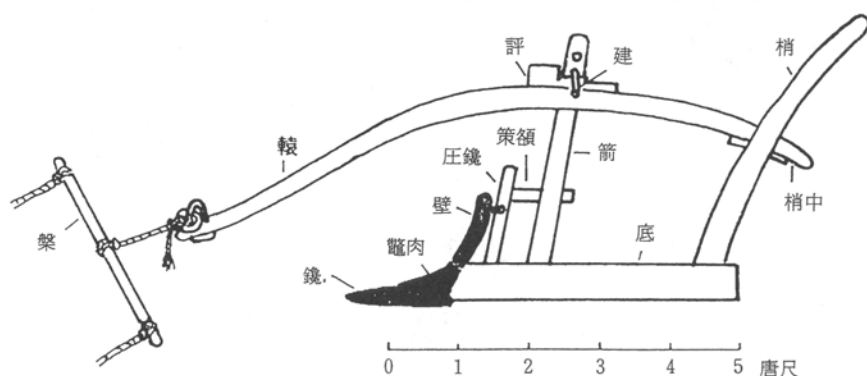


図17 唐代曲轅犁復元図（渡部 1991）

では轅の部分が直線的に延びていたの対し、これは轅が中央で斜め下方に曲がっていることから曲轅犁と呼ばれるものである。

渡部武は「従来は江東地方で独自に考案されたと思われるが、実際に陸龜蒙の『耒耜經』成立以前の犁耕図および文献資料を検討してみると、曲轅の出現はそれより遥かに古い²²⁾」（渡部 1989）とされる。『耒耜經』は、唐末（9世紀代）の陸龜蒙によって著された、自己の荘園で働いている農民から直接に農具の構造と操作方法を尋ね記したものである。その中で犁轅については、「先端が曲がって程（擔い棒）のように湾曲している部分を犁轅と称する²³⁾」とある。陸龜蒙が死んだとされるのは880年前後²⁴⁾とされるので、その頃には一般的に曲轅犁が江南地方でも一般的に使用されるようになっていたと考えられよう。

また、図18の敦煌莫高窟壁画中の犁耕図に見られるように、盛唐時代には完全な曲轅犁があったことが、壁画からも証明されている。



図18 敦煌莫高窟第445窟壁画の曲轅犁（渡部 1989）

兵庫県氷上郡市島町の梶原遺跡から出土した、7世紀中葉とされる曲轅長床犁について河野通明は、「……律令制の採用にともなって北中国から導入されたものと見てゐる。その伝来事情はどうあれ、この曲轅長床犁が中国系であることは間違いなく、初唐の中国では日本に導入されるほど曲轅長床犁が普及していた事に間違いな

い²⁵⁾」とされている。漢代の長床犁は直轅であったが、それが初唐までの間に改良されて曲轅となったものと考えられよう。

以上、考古遺物から考えられている、中国の犁耕について見てきた。崧沢～良渚文化期に出現する石犁を、畜力か人力かは別として、犁耕具として考えられるのか否かが、やはり大きな問題である。春秋戦国時代の牛尊からは、文献資料との整合性から、犁耕

（牛耕）の存在は、定説となっていると考えることができよう。しかし、崧沢・良渚文化期の石犁を、犁耕具とできるかどうかは、現在までのところ、中国では畜力か人力かは別として、犁耕として理解する意見が多いようである。筆者は、良渚文化博物館などで、2～3例の石犁・破土器を見たのみであるので、肯定も否定もできない。類例の増加や新知見を期待したい。

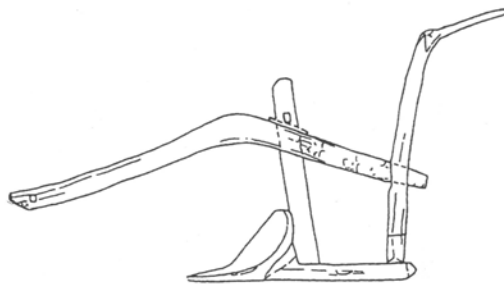


図19 兵庫県梶原遺跡出土の犁（河野 1996）

4. 民俗史料から見た犁耕

民俗学的な中国における犁耕研究については、長い研究の歴史がある。筆者の能力ではそのすべてを網羅することはできないので、最近の研究を見ていきたい。

渡部武、C・ダニエルズ等が行っている一連の西南中国研究の成果が発表されている（C・ダニエルズ 1994、渡部 1996 ほか）。さらに最近では『中華農器図譜』が刊行され、急速な経済発展の中で失われつつある、伝統中国の農具が紹介されている。

渡部武の研究によると、唐代の「南詔図巻²⁶⁾」に描かれている二牛抬横式（図20）の犁と同じものが、現代の麗江地方（雲南省昆明の西北約600km）でも使われており、「現代まで伝えられた「生きた化石」として一見に値するもの」とされている²⁷⁾（図21）。

また河野通明は中国の牛耕について、「中国で独自に起こり発達したものだ」という見解が中国の研究者にはある



図20 「南詔図巻」の二牛抬槓式の犁（渡部 1999）



図21 雲南納西族の畑地用在来犁（渡部 2000）

が、私は家永泰光氏が説くように、インド西部、西アジアに起源をもつ牛耕がシルクロード経由で中国西部に伝えられたのだと考えている²⁸⁾とされている。

また河野は、人力による犁についてもまとめておられる。「引綱つき鋤類」については、「刃先の動きは土中―空中を繰り返す往復運動であり、犁の刃先が土中に潜ったまま連続的に前進するのとは別系統の動きであり、あくまで鋤＝スコップ類の延長上にその一分枝として特化したものであって、犁とは進化の系統樹では根っこの部分で枝分かれした別系統の道具²⁹⁾」としている。

また河野は、引綱つき鋤類の綱部分が木製の轆になった「鏟犁」（図23）についても、「刃先の動きは引綱つき



図22 引綱つき鋤類（河野 1996）

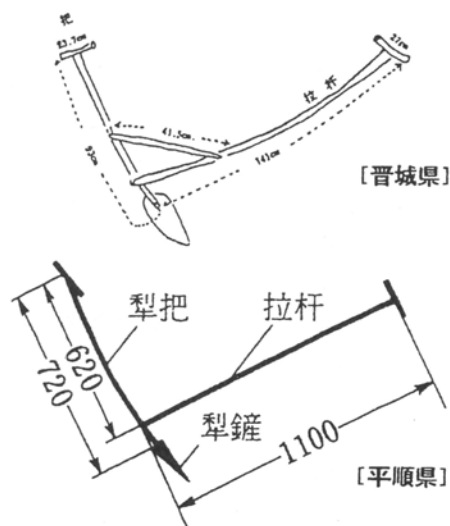


図23 山西省の鏟犁（河野 1996）

鋤類と同じく往復運動であり、犁とは別系統の道をたどって進化の極相にいたった特殊な道具」とされている。さらに、首木（軛）や尻枷（耕桯）など牽引方法の発展により、二牛抬槓式から一頭引きの揺動犁へと発展していったことも指摘しておられる。河野は「……アジアでは曲轆長床犁は中国犁とさえ呼ばれることがあるくらい中国に顕著な犁型であり、他方、朝鮮半島では無床犁の卓越する地域である。そうだとすれば〔二頭引き直轆長轆長床犁 → 一頭引き曲轆短轆長床犁〕の進化過程は中国大陆で展開したものであり、これに対して、〔二頭引き直轆長轆無床犁 → 一頭引き直轆短轆無床犁〕の進化過程は朝鮮半島で進行したものと想定されよう。³⁰⁾」と想定されている（河野 1996）。

引綱つき鋤類・鏟犁のような人力犁については、有蘭正一郎の研究もある（有蘭 1997 ほか）。有蘭は、「人力犁は、それほど費用をかけなくても入手でき、構造が簡単であるために使い勝手がよく、寸法が小さいために畜力犁よりも小回りがきく……³¹⁾」と評価されているが、東アジアにおける人力犁の分布が限られていることについては、その理由は分からないとしている（有蘭 2002）。

応地利明は、ユーラシア大陸規模の「長床犁の道」を想定し、「地中海からほぼアジア大陸南縁の褶曲山脈列にそって東進してチベットにはいり、さらに長江中・下流域平原にいたって大きく開花したのち、東および東南アジアの有鏟犁地帯へと拡大を遂げる。……日本も「長床犁の道」の延長に属する³²⁾」とされている（応地 1987）。

最後に、筆者の経験を記したい。筆者が現代中国において牛耕を実見したのは、四川省成都市北西にある都江堰市においてである。2000年10月下

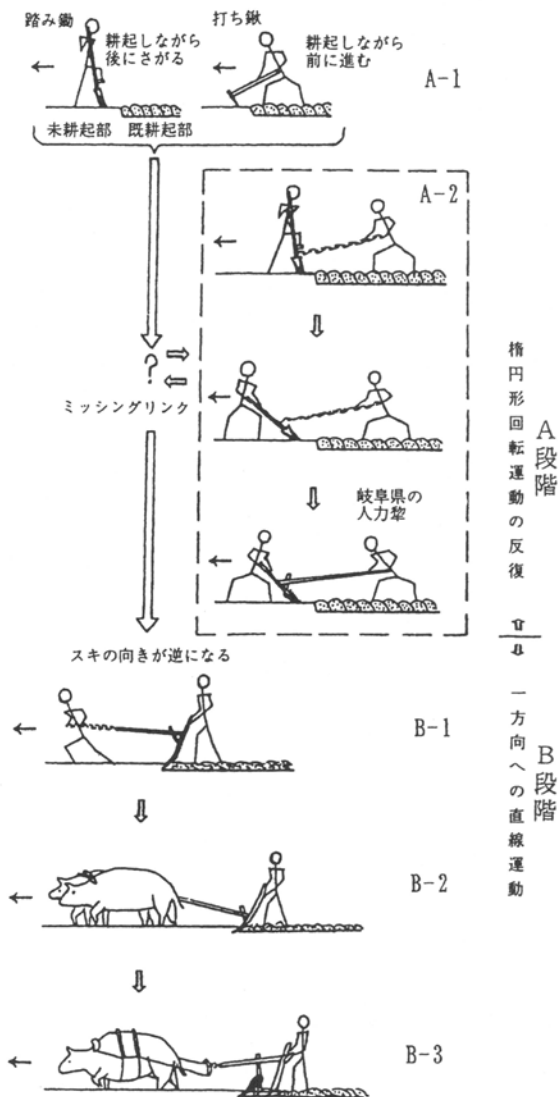


図24 耕器具の発達過程模式図 (有菌 2002)

旬に四川省に行く機会に恵まれたが、その折都江堰市で、牛耕の様子を実見することができた。

図25は牛に犁を挽かせてアラオコシをしている様子である。見ていた限りでは、アラオコシは1度であり、大きな土塊が反転されている様子がわかる。使用していた犁は、犁壁（撥土板）はついておらず、操作する農民が犁を右に傾ければ右に、左に傾ければ左に土を起こしていくのであって、きわめて単純明快である。

その後、耙を使用して縦方向と横方向に合わせて3回ほど、土塊を砕き整地していく。図26から図27へと変化するにつれて、土塊が砕けて細かくなっていく様子がわかる。さらに、一度目の耙地は土囊を重しとして乗せるが、2度目・3度目になってある程度土塊が細かくなると、人間が耙に乗って仕上げを行う。これは、魏晉南北朝時代の画像磚に描かれている作業(図28)とそっくりな光景である。



図25 犁によるアラオコシ (四川省都江堰市 2000)



図26 耙による整地 (四川省都江堰市 2000)



図27 人間が耙に乗って仕上げ (四川省都江堰市 2000)

このような光景を見てみると、犁の木製から鉄製への進歩・直轅から曲轅への発展などに見られる技術発展の中にあっても、行っている作業は同じであり、人類の悠久の歴史を感じざるをえない。牛耕を見ている時に成都市の知人が、「中国の農耕技術は、数千年前からあまり変化していない」と言った言葉が印象的であった。

以上、簡単に現代中国における犁耕を見てきたが、筆者が感じるのは、どうも中国においては、唐代に直轅犁から曲轅犁への進化はあったが、総じて漢代の画像石・画像磚以後、あまり犁耕については変化がないように感じられる。それは渡部武の指摘にあるように、一地域ではあるが、二牛抬横式の牛耕が現在でも行われていることから察せられる。

河野通明は、「犁耕の中国国内起源説の論者があげてきた論拠の多くは、進化の系統樹の犁の枝の根元に位置す

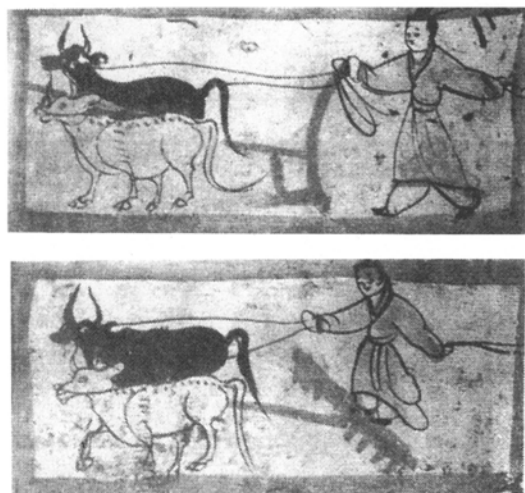


図28 甘肅省嘉峪関出土画像磚

るものとはいえず、したがって中国国内起源説ははなはだ確実性に乏しいと言わざるを得ない³³⁾」(河野 1996)とする。筆者は中国漢代にも牛馬耕の導入されていない地域では、小区画水田があった可能性を考えており、現在までのところ河野通明の意見に賛成である。

5. まとめ

中国における犁耕研究について概観してきたが、やはり中国国内起源説と外來說、またその導入・普及過程については、未だ一致した見解は無く、模索段階と言えよう。ただ従来から指摘されていたように、春秋戦国時代には、晉国など華北地方に導入されていたことは、間違いないと考えられる。それが崧沢・良渚文化の石犁を根拠として、一気に遡るのかどうかは、今後の研究に待つほかは無い。

中国では、1990年代から、江蘇省草鞋山遺跡(馬家浜文化後期)や湖南省城頭山遺跡(湯家崗文化)からBC 4000年頃の水田跡が、また江蘇省藤花落遺跡から山東龍山文化後期の水田跡が報告されている³⁴⁾。しかし、未だ事例が少なく、水田稲作の歴史を復元できるまでに達しておらず、日本との比較も十分には行えない状況である。事例の増加を期待したい。

最後に、牛馬耕の普及について考えておきたい。本文中でも触れたが、牛馬耕が普及するには、農耕技術的にはもちろん、牛馬飼育が人間の生活レベルを向上させるに値するだけの社会経済的背景・システムが必要であろう。つまり、農耕のみならず、祭祀・食肉・運搬(平時・戦時)・皮革などにおいても牛馬は必要とされるのであり、その一つ一つの需要が有機的に統合されて、総合的に牛馬を飼育する経済的動機が生まれてくると考えられるからである。農耕利用は、牛馬需要の中の一部であり、それだけをもって牛馬耕を語ることは片手落ちであろう。今後は、総合的な牛馬需要の構造を解明することこ

そが、日本も含めて、東アジアにおける牛馬耕を解明する上でも必要であろう。今後に期したい。

紹介・引用した諸先生がたの研究については、はなはだ意をつくしていない点について、お詫しを請いたい。また、時間的制約から原典にあたっていない報告書もあり、末尾ながらお詫びしたい。

引用・参考文献

- 天野元之助 1979 『中国農業史研究 増補版』お茶の水書房。
 有園正一郎 1997 『在来農耕の地域研究』古今書院。
 有園正一郎 2002 「東アジアの人力犁について」『もの・モノ・物の世界—新たな日本文化論』雄山閣。
 家永泰光 1980 『犁と農耕の文化』古今書院。
 応地利明 1987 「犁の系譜と稲作」『稲のアジア史—アジア稲作文化の生態基盤—技術とエコロジー』1 小学館。
 大澤正昭 1993 『陳粵農書の研究』農山漁村文化協会。
 大澤正昭 1996 『唐宋變革期農業社会史研究』汲古書院。
 梶山勝 1989 「長江下流域新石器時代の稲作と畑作に関する一考察」『古文化談叢』第20集(下) 九州古文化研究会。
 クリスチャン・ダニエルズ・渡部 武編 1994 『雲南の生活と技術』慶友社。
 クリスチャン・ダニエルズ・渡部 武編 1999 『四川の考古と民俗』慶友社。
 江西省博物館・江西省文物考古研究所・新干県博物館 1997 『新干商代大墓』文物出版社。
 河野通明 1994 『日本農耕具史の基礎的研究』和泉書院。
 河野通明 1996 「東アジアにおける犁耕の展開についての試論」『商経論叢』1996-6 神奈川大学経済学会。
 呉 存浩 1996 『中国農業史』警官教育出版社。
 湖南省文物考古研究所 1999 「澧县城頭山古城址1997~1998年度発掘簡報」『文物』第6期。
 小柳美樹 1997 「石犁・破土器・耘田器」『日本中国考古学会会報』第7号。
 周 昕 1998 『中国農具史綱及図譜』中国建材工業出版社。
 宋樹友主編 2001 『中国農器図譜』中国農業出版社。
 田崎博之 1999 「長江下流域の土地環境と稲作・水利開発」『日中文化研究—環境から考える東アジア農業—』14 勉誠出版。
 銭 小康 2002 「犁」『農業考古』第1期。
 銭 小康 2002 「犁(続)」『農業考古』第3期。
 中村慎一 1986 「長江下流域新石器文化の研究—栽培システムの進化を中心に—」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第5号 東京大学文学部考古学研究室。
 中村慎一 2002 『稲の考古学』同成社。
 西嶋定生 1981 『中国古代の社会と経済』東京大学出版会。
 原 宗子 1997 「陝北黄土高原の環境と農耕・牧畜」『黄土高原とオルドス(日中文化研究別冊3)』勉誠社。
 牟 永抗・宋 兆麟 1981 「江浙の石犁和破土器」『農業考古』第2期。
 楊 美莉 1999 「良渚文化石質工具の研究—三角形石質工具之形制、性質之分析—」『農業考古』第3期。
 米田賢次郎 1989 『中国古代農業技術史研究』同朋舎。
 俞為潔(小柳美樹 訳) 1996 「良渚文化期の農業」『良渚文化—中国文明の曙光—』日中文化研究第11号 勉誠社。
 李 根蟠 1991 『中国古代農業』天津教育出版社。
 李 根蟠 1992 『中国農業史』文津出版。
 李 曙行 1987 「“石犁” 辨析」『農業考古』1987-2。
 林 留根等 2000 「江蘇省連雲港藤花落現龍山文化稲田遺跡」『農業考古』2000-3。
 渡部 武 1988 「中国古代犁耕図再考—漢代画像に見える二つのタイプの犁をめぐって—」『古代文化』40-11。
 渡部 武 1989 「唐・陸龜蒙の『耒耜經』と曲轅犁の成立」『東洋史研究』48-3。

- 渡部 武 1991 「犁耕文化のひろがり」『画像が語る中国の古代』平凡社。
- 渡部 武 1996 『雲南少数民族伝統生産工具図録』慶友社。
- 渡部 武 1999 「西南中国の在来犁の諸問題—唐代「南詔図巻」中の二牛抬槓図をめぐる一」『日中文化研究』14 勉誠出版。
- 渡部 武・渡部順子 2000 『西南中国伝統生産工具図録』慶友社。

註

- 1) 天野元之助 1962(1981) 『中国農業史研究 (増補版)』お茶の水書房、p.824。
米田賢次郎 1968 「二四〇歩一畝制の成立について—商鞅變法の一側面—」『東洋史研究』26-4、後同氏 1989 『中國古代農業技術史研究』同朋舎、所収。
古賀 登 1980 「阡陌攷—240歩=1畝制の成立問題を中心として—」『漢長安城と阡陌・県郷亭里制度』雄山閣。
- 2) 吳 1996 『中国農業史』p.250。
- 3) 京大東洋史辞典編纂会 1980 『新編東洋史辞典』東京創元社。
- 4) 貝塚茂樹 1978 『世界の名著3 孔子 孟子』中央公論社。
- 5) 註4と同。
- 6) 註4と同。
- 7) 註3と同。
- 8) 吳 1996 『中国農業史』P-251。
- 9) 李根蟠 1991 『中国古代農業』p.29、同氏 1992 『中国農業史』p.83。
- 10) 周 昕 1998 『中国農具史綱及図譜』p.32。
- 11) 天野元之助 1979 『中国農業史研究 増補版』p.736。
- 12) 西嶋定生 1981 『中国古代の社会と経済』pp.45-46。
- 13) 米田賢次郎 1968 「二四〇歩一畝制の成立について—商鞅變法の一側面—」『東洋史研究』26-4、のち同氏 『中国古代農業技術史研究』pp.138-139。
- 14) 中村慎一 1986 「長江下流域新石器文化の研究—栽培システムの進化を中心に—」pp.156。同氏 2002 『稲の考古学』p.152。
- 15) 中村慎一 2002 『稲の考古学』p.153。
- 16) 梶山 勝 1989 「長江下流域新石器時代の稲作と畑作に関する一考察」pp.201-205。
- 17) 河野通明 1996 「東アジアにおける犁耕の展開についての試論」pp.103-117。
- 18) 小柳美樹 1997 「石犁・破土器・耘田器」p.111。
- 19) 註18と同、pp.118。
- 20) 渡部 武 1988 「中国古代犁耕図再考—漢代画像に見える二つのタイプの犁をめぐる一」p.11 (511) ~12 (512)。
- 21) 河野通明 1996 「東アジアにおける犁耕の展開についての試論」p.133。
- 22) 渡部 武 1989 「唐・陸龜蒙の『耒耜經』と曲轅犁の成立」『東洋史研究』48-3、p.83 (503)。
- 23) 渡部 武 1989 「唐・陸龜蒙の『耒耜經』と曲轅犁の成立」『東洋史研究』48-3、p.69 (489)。大澤正昭は、「前の方で柱のよう曲がっているものを轅と曰う」と訳されている。大澤正昭『『耒耜經』の犁について』『唐宋變革期農業社會史研究』P.67 汲古書院。
- 24) 北田秀人 1987 「九世紀江南の陸龜蒙の莊園」『日野開三郎博士頌寿記念論文集』中国社会・制度・文化史の諸問題』中国書店。
- 25) 河野通明 1996 「東アジアにおける犁耕の展開についての試論」p.155。
- 26) 「南詔図巻」は、南詔王国の建国伝承を絵画と解説文の2巻にまとめたものという (渡部 1999)。
- 27) 渡部 武・渡部順子 2000 『西南中国伝統生産工具図録』p.120。
- 28) 河野通明 1994 『日本農耕具史の基礎的研究』p.166。
- 29) 河野通明 1996 「東アジアにおける犁耕の展開についての試論」p.116。
- 30) 河野通明 1996 「東アジアにおける犁耕の展開についての試論」p.125。
- 31) 有蘭正一郎 2002 「東アジアの人力犁について」『もの・モノ・物の世界—新たな日本文化論』

- 32) 応地利明 1987 「犁の系譜と稲作」『稲のアジア史1』(普及版1997) p.205。
- 33) 河野通明 1996 「東アジアにおける犁耕の展開についての試論」『商経論叢』p.117。
- 34) 湖南省文物考古研究所 1999、林2000。

図版引用文献

- 図1・6 牟 永抗・宋 兆麟 1981 「江浙の石犁和破土器」『農業考古』第2期。
- 図2~5 中村慎一 1986 「長江下流域新石器文化の研究—栽培システムの進化を中心に—」『東京大学文学部考古学研究室研究研究紀要』第5号 東京大学文学部考古学研究室。
- 図7 俞為潔(小柳美樹 訳) 1996 「良渚文化期の農業」『良渚文化—中国文明の曙光—』日中文化研究第11号 勉誠社。
- 図8~10 江西省博物館・江西省文物考古研究所・新干県博物館 1997 『新干商代大墓』文物出版社。
- 図11・25・26・27 都江堰市にて筆者撮影 (2000)。
- 図12~16・28 陳 文華 1991 『中国古代農業科技史図譜』農業出版社。
- 図17 渡部 武 1991 「犁耕文化のひろがり」『画像が語る中国の古代』平凡社。
- 図18 渡部 武 1989 「唐・陸龜蒙の『耒耜經』と曲轅犁の成立」『東洋史研究』48-3。
- 図19・22・23 河野通明 1996 「東アジアにおける犁耕の展開についての試論」『商経論叢』1996-6 神奈川大学経済学会。
- 図24 有蘭正一郎 2002 「東アジアの人力犁について」『もの・モノ・物の世界—新たな日本文化論』雄山閣。